

『宣講彙編』四卷―案証の再編

阿部泰記

一 はじめに

『宣講彙編』四卷は封面に「光緒戊申（三十四年、一九〇八）春月、経元書室重刊」と記載する。『宣講福報』『宣講珠璣』『宣講摘要』と時期を同じくして出版された。いずれも序文はないが、私見によれば、本書四卷は案証をアトランダムに収録したわけではなく、ほぼその主題によって分類して収録しているようである。また案証の出典を注記しており、それらの出典は現存せず、原典をどのように改編したか確認するすがないが、『宣講集要』などに収録する案証と同じ案証があり、それらと比較すると、本書に収録する案証はよりわかりやすく改編されていることが分かる。また小説に取材した案証があり、ストーリーをおもしろく改編して聴衆を魅了していることも分かる。本論では本書のこうした特徴を明らかにしたい。

二 四卷の分類

四卷の案証は全四十一篇で、目次は以下のごとくである。

卷一（十一篇）「積米奉親」「臥水求魚」「楊一哭墳」「孝虎祠」「慈孝堂」「孝逆異報」「炸麦生虫」「点滴旧窠」「砍断手」「遵諭明目」「三家免劫」

卷二（十一篇）「厚族獲報」「敬兄愛嫂」「争死救嫂」「壳身救兄」「尊兄撫姪」「讓産讓名」「三理報」「二子乘舟」「友愛全節」「知恩報恩」「葉三奇案」

卷三（八篇）「棄家贖友」「舍身全交」「生死全信」「見利忘義」「忍口獲福」「傷生悔過」「風吹谷飛」「飯無常」

卷四（十一篇）「和順化人」「規賭全貞」「借狗勸夫」「跪門受譴」「賢妾撫子」「断機教子」「矢志守貞」「白猿献菓」「紅蛇纏身」「穢灶奪紀」「飯斎婆」

私見では、主として卷一は「孝」（親子愛）、卷二は「悌」（兄弟愛）、卷三は「義」（友人愛）、卷四は「貞」（夫婦愛）という主題によってそれぞれ分類しているようである。そこで、以下にその梗概を記してこのことを明らかにしたい。なお（ ）内は記載された出典である。

「積米奉親」〔寶蓮舟〕（宣十場）―母子の孝。西漢、四川德陽県の張文進は善行に努めて子正興を授かり、正興は妻李秀貞を娶って子平安を授かる。秀貞は孝行で、姑陳氏が発病すると、腕の肉を割いて陳氏に食させ、さらに病氣快復を祈願するが、陳氏は近隣の朱胡氏の讒言を信じて呪詛されたと疑い、正興に秀貞を離縁させる。秀貞が白雲庵に住むと、平安は米を届ける。後に父子は高官に就任し、陳氏も誤解を解いて秀貞を迎え、朱胡氏は絞殺に処せられる。

「臥氷求魚」〔勸世編〕（宣七場）―王祥の孝。西晋の王祥は継母朱氏のために真冬に氷上に身を横たえて氷を溶かし二匹の鯉魚を得る。また朱氏のために黄雀を捕らえ、李樹の見張りをして風を止める。朱氏は王祥に毒酒を勧め、刺殺を謀るが、王覽が阻止する。王祥は朱氏に許しを求め、朱氏は悔悟する。

「楊一哭墳」〔覺世盤銘〕（宣五場）―楊一の孝。武進の楊一が親の墓で泣いて天から銀を賜る。

「孝虎祠」〔覺世盤銘〕（宣三場）―猛虎の孝。明崇禎年間、遼東の趙城羽の子を食った虎がその母を養う。

「慈孝堂」〔救世保元〕（宣三場）―竇娥の孝。唐の蔡文茵が竇成文の娘竇娥を娶り、科挙受験のため上京する間、竇娥は蔡家で姑張氏の世話をすが、張氏は薬医の売り掛けを徴収して逆に殺害されそうになり、乞食張驢児母子に救われて家に住まわせるが、驢児は薬医に毒薬を調合させて張氏を毒殺して竇娥を奪おうとし、驢児の母

が毒味して死ぬと、張氏を訴える。竇娥は身代わりになるが、八府巡按になった竇成文が冤罪をはらし、將軍になった文茵が驢児と薬医を捕らえ、張氏と竇娥には「慈孝堂」の扁額が下賜される。

「孝逆異報」〔仁寿鏡〕（宣四場）―孝と不孝。清道光初、奉節県の朱氏五兄弟は木訥で、特に四弟応江は肝を割いて母の病氣を治したほどであったが、朱榮榜と妻晏氏は不孝で、老母を虐待して殺す。応江は慈善に努めて出家し、榮榜は一族が絶滅する。

「炸麦生虫」〔覺世盤銘〕―不孝。山西太原府韓城県の王芳桂の次男応武と妻張氏は芳桂を餓死させたため地獄に連行される。

「点滴旧窠」〔廻生舟〕―不孝。仁寿県（四川）の李文玉は父母に従順ではなく、子貴保が文玉の誕生日に文玉の不孝を暴露する。

「砍断手」〔勸世編〕（宣三場）「劉光燦遊冥」―不孝。道光二十九年四月十三日、璧山県（四川）の劉光燦は賭博に狂って父母を世話せず、また賭博をしたら手を切断されると誓ったため、地獄に連行されて閻帝に右手を切除される。

「遵諭明目」〔遵諭集成〕（宣三場）―不孝。昔、理明、楊二。楊二の妻万氏。わがままで失明するが、聖諭宣講を聞いて目が見えるようになる。

「三家免劫」〔上元基命〕（宣五場）―善と悪。明、嚴嵩父子が暴政を行い、悪人がはびこる時、興化県（江蘇）に道人が現れて善行を勧める。鞏某は聴かず同族鞏氏の財産を奪うが、広世徳は鞏氏を救い、善行に努めたので、魏益公・闕疑とともに倭賊から身を守る。

「厚族獲報」(『一声雷』)(宣三場) — 宗族。宋の范仲淹(九八九—一〇五二)は宰相になって俸禄で義田を設置して宗族を救済し、死後に閻魔となる。明末の劉子平も宗族の仲裁をする。

「敬兄愛嫂」(『一声雷』)(宣五場) — 姉妹。宋の鄒子誠の後妻呉氏は「蜈蚣虫」という綽名を持つ悪女で、子誠の死後、遺子鄒瓊を虐待するが、呉氏の娘鄒瑛は兄に妻を娶らせ、学問をさせ、虐待される嫂荆氏を護る。荆氏は誤って鄒瑛の子を殺すが、鄒瑛の舅姑は鄒瑛をいたわる。呉氏はそれを見て反省する。荆氏は観音に祈願して鄒瑛は病気が治癒する。

「争死救嫂」(『救世保元』)(宣五場) — 姉妹。臨潼県(陝西)の白雲高の後妻米氏は先妻孫氏の子玉璧が死ぬとその妻馮氏を虐待するが、米氏の子玉美の妻高氏が馮氏をかばう。馮氏の子が死ぬと馮氏は一緒にいた高氏を責めずに慰める。米氏の甥が馮氏に抵抗されて死ぬと、高氏が代わりに刑に服する。清官が事件を調査して真実が明らかにされ、二人の嫁に双義牌坊が下賜される。

「売身救兄」(『清夜鐘』)(宣四場) — 兄弟。康熙七年、貴州開州の周兄弟。兄之美が誤って賊を殺す。弟之英が王家に身を売って保釈金を作る。州官が金を工面して之英を救う。

「尊兄撫姪」(『宝蓮舟』)(宣四場) — 兄弟。本朝康熙年間、商兄弟。商大とその妻馬氏は吝嗇で弟商二に米を貸さなかったが、商二は商大が賊に襲われると商大を救う。馬氏は商二の家を買い取ったため

賊に襲われ、商大は殺され、馬氏は乞食をする。商二は商大の子を救い、家を再興する。

「讓産讓名」(『洗心録』)(宣五場) — 兄弟。昔漢明帝の時、会稽郡陽羨県の許武は弟許晏・許晋を教育し、御史に就任して弟たちが出世していないのを見ると、弟たちを結婚させ分家させる。許武は弟たちに瘦せた土地を分けるが弟たちは不満を言わず、人々は許武を非難し許晏・許晋を賛美したため、弟たちは出世する。⁴

「三理報」(『鏡心録』)(宣二場) — 不悌。重慶府江津県の梁友は家族が多く祖先の田を売って借金を返すと、弟梁義は友人劉才の天理・道理・情理による諫めも聴かず梁友を訴えたため、梁友は獄死し、梁義は科挙に落第し地獄に墮ちる。

「二子乘舟」(『名教範圍』)(宣六場) — 兄弟。春秋時代、衛宣公の子公子朔は母齊姜を通じて長兄伋を宣公に讒言し、伋の母夷姜は縊死する。宣公は朔とともに伋の暗殺を謀るが、朔の兄寿が代わりに舟で行って殺され、伋も舟で後を追って殺される。宣公は左公子洩と右公子職から寿の死を聞いて死に、朔が王位を継いで恵公と称すが、洩・職は大夫寧と諮って伋の弟黔牟を即位させる。

「友愛全節」(『頂門針』)(宣四場) — 兄弟。扶風県の史兄弟。病死した三男定綱には子がなく、次男定国は次子長寿を定綱の妻徐氏の養子とする。長男定邦と四男定常が財産ねらいと疑ったため、徐氏は怒って再婚しないと表明し、定常の許嫁艾氏が書面で不道德な行為をやめるよう説得する。徐氏は節烈無双の扁額を下賜され、定国

は死後に城隍となる。

「知恩報恩」(『頂門針』) 女案、視嫂如母(宣六場) — 姉妹。宋の廖忠臣は妻欧陽氏の説得で親孝行になる。母が閨娘を生んで死ぬと、欧陽氏は閨娘に授乳し、娘秀女には近所の王大嫂の乳を借りる。欧陽氏は事情を秀女に語る。欧陽氏が病死すると秀女が雷神に祈願し、欧陽氏は蘇生する。⁷

「葉三奇案」(『八宝舟』) (宣三場) — 公案。道光二十九年、広安州(四川)の王大才は遠地に商売に出て帰り、儲けた金を付近の黄槐樹に隠して商売に失敗したと嘘を言って妻の貞節を試すが、隠した金を盗まれる。州知事は城隍に祈願して黄槐樹を審問すると、葉三枚が落ちたので犯人を葉三だと推測する。

卷三(義)

「棄家贖友」(『名教範圍』) (宣七場) — 友情。唐開元年間、河北武陽の呉保安は西蜀叙州の方義尉となり、宰相郭元振の甥で副將軍の郭仲翔の推薦を得て李蒙の部下に採用される。李蒙は戦死し、仲翔は捕虜となり、姚州の保安に救いを求める。保安は長安に赴くが元振は死んでいた。保安は家産を売って仲翔を探しに出る。保安の妻張氏は姚州都督楊安居の支援で保安を探し出し、仲翔を贖わせる。仲翔は任官して保安夫妻の葬儀を行う。⁸

「舍身全文」(『名教範圍』) (宣七場) — 友情。春秋時代、左伯桃と羊角哀はともに楚国に任官を求めるが、雪山で食料が尽き、角哀だ

けが楚国に向かい、上大夫裴仲を介して元王に謁見し中大夫を授かる。角哀は伯桃を弔い、荆軻に襲われると聞いて、死んで荆軻と戦う。⁹

「生死全信」(『名教範圍』) (宣八場) — 友情。漢、山陽の范式(巨卿)と汝南の張劭(元伯)は都の太学で知り合って交友を深め、范式は九月十五日に張劭を訪れるが、張劭は別れて後、范式を思つて病氣になり、魂魄が平陽功曹の范式のもとへ訪れ、九月十五日の葬儀に来てほしいと告げる。范式は約束どおり葬儀に駆けつける。¹⁰

「見利忘義」(『清夜鐘』) (宣五場) — 背信。明万曆年間、孝感県(湖北)の劉尚賢は近所の張時明と昵懇の間柄であったが、道端で黄金を見つけると、時明は欲が出て尚賢を殺して独り占めを謀るが、尚賢も時明の毒殺を謀っており、二人は同時に死んでしまう。

「忍口獲福」(『仁寿鏡』) (宣四場) — 非業。乾隆年間、浙江嘉興府の李定は言葉を慎んで人を救つて科挙に合格するが、同郷の祝期生は人を唆して不幸に陥れたため妻子を亡くし、舌を引き抜いて惨死する。

「傷生悔過」(『中流柱』) (宣一場) — 殺生。金堂県(四川)の郭思洪は殺生を好んで竈君新論も聴かずして失明するが、母が竈神に祈つて快復したため、反省して殺生を好む余九江に応報を説いて回心させる。

「風吹穀飛」(『中流柱』) (宣七場) — 吝嗇。蜀川巴西の羅密は飢餓の民衆に穀物を恵まず、許容の諫言も聴かなかつたため、菩薩和來孫

が文昌帝君に告げ、天帝が羅密の倉庫を壊して穀物を飢餓の民衆に分け与える。羅密は恥じて縊死する。¹²

「仮無常」(『阿鼻路』)(宣六場) — 非業。康熙年間、金在鎔は劉耀海から借金し、耀海の子興發が取立に来るが、妻袁氏が借金は無いと偽る。袁氏は耀海に似た二子金龍・金鳳を出産するが、金鳳は失踪し、金龍は袁氏に金を返せと言って死に、袁氏は半身不随になる。隣家の雷裁縫子は呉二爺(無常)に変装して金龍の妻謝天香に言い寄るが、天香も無常に変装して雷裁縫を気絶させる。天香は自首して朱文斗が嫂焦氏を娶った裁判を聴き、原告の童生銭鳳が金鳳だと悟る。官は天香に褒賞を授け、銭鳳は金・銭両家の後継となる。

卷四 (一貞)

「和順化人」(『覺世盤銘』)(宣二場) — 和合。開県(四川)の馬雪堂と妻章氏は溫柔かつ孝順で、親族が反対しても母の望みどおり姉妹に多く分ける。同年の黄立堂と花氏は仲が悪く、馬生は「好和歌」を歌って聴かせると、夫婦は忍耐を知って仲良くなる。

「規賭全貞」(『破迷鍼砭』)(宣四場) — 賢妻。本朝乾隆年間、江南宣城の陸鑑明と妻焦氏は仲が良かった。鑑明が賭博に狂い、焦氏を臧二八に売る。焦氏は悲しんで縊死し、官は焦氏を節孝祠に祭り、鑑明の指を切り取る。

「借狗勸夫」(『破迷鍼砭』)(宣二場) — 賢妻。昔、趙孟は孫錢二悪友と親しんで弟趙仲を疎んじる。妻張氏は趙孟に「仁義酒」「親愛湯」

を勧めて兄弟和睦を説き、死んだ犬を死者に仕立てて殺人事件を装い、孫錢二人を呼ぶが、二人は来ず趙仲が処理する。孫錢は官に密告するが、張氏が事実を明かし、張氏は表彰され、孫錢は処罰される。¹³

「跪門受譴」(『勸世新編』)(宣六場) — 愚妻。安岳県(四川)の郭文挙の妻は愚昧で分家を主張し、果ては泣き叫ぶ嬰兒を尿桶に入れて殺したため、竈神に打たれる。宣講生艾子謙の勧めで竈神の前で懺悔し、竈神に打ち殺される。

「賢妾撫子」(『廻生舟』)(宣四場) — 賢妾。明洪武年間、懷遠県(四川)の花雲の妻郃氏は花雲に妾孫氏を娶らせ、花嬢が生まれる。花雲は陳友諒と戦って戦死し、郃氏は花嬢を孫氏に托して自害する。孫氏は花嬢を抱いて葦の茂みに隠れ、鬼神に明太祖のもとに送られる。

「断機教子」(『廻生舟』)(宣四場) — 賢母。昔、商林が許嫁の秦雪梅を見て病気になったため、侍女媛玉によって「充喜」を行うが、露見して商林は死ぬ。雪梅は喪に服して媛玉が生んだ商輅を育てるが、母と認めないので織布を裂くと輅児は雪梅にわびて勉学に励む。

「矢志守貞」(『名教範圍』)(宣五場) — 貞女。本朝、富平県(陝西)の薛秀英は謝有義と婚約したが、康熙の飢饉に謝家は移住したため、祖父は秀英を焚武に売ろうとするが、楊県令が秀英を保護し、有義との結婚を仲介する

「白猿献菓」(『名教範圍』)(宣四場) — 貞女。本朝康熙年間、桐梓

県（四川）の李環の妻屠氏は李環が死ぬと家産を売って葬儀を行って遺子光祖を養う。呉三桂の乱に遭うが白猿が果物を運んで飢餓を乗り越え、県令が保護して表彰される。

「紅蛇纏身」（『破迷鍼砭』）（宣四場）―愚妻。昔陽県（山西）の陳一清の妻許氏は女兒を三人溺死させ、宣講生の忠告も聴かず、殺された嬰兒が紅蛇となって身に纏わり内蔵を食い尽くす。

「穢灶奪紀」（『遵諭集成』）（宣四場）―愚妻。西安府（陝西）の司徒林の妻林氏は神霊を信じず強弁を得意とし、竈を汚したため、齒が抜け落ち、寿命を削られ地獄で舌を抜かれる。

「仮斎婆」（『救世編』）（宣三場）―悪女。順慶府広安州（四川）の余氏は夫の死後、二子楊逢春・逢時を育てた。隣家の朱氏は「仮斎娘」と綽名される悪女であり、竈で蟻を焼き殺し、鯀魚・黄鱔を食べ、嫁を罵ったため、七穴から血を流して死ぬ。

以上のように各巻の案証は一部分を除いておおむね「孝」（親子愛）、「悌」（兄弟愛）、「義」（友情）、「貞」（夫婦愛）に分類して収録されており、主題がわかりやすくなっている。

三 案証の改編

さらに本書では新しい案証を提供するために、先行する案証をそのまま掲載するのではなく改編して掲載したと思われる。

巻一

「積米奉親」は「安安送米」説話を述べる。「宝蓮舟」に取材するというが、『宝蓮舟』は現存しないため、『宣講集要』巻十一「積米奉親」と比較すると、人名をすべて変えて新しい話としている。『宣講集要』の記述は以下のごとくであり、後世の「安安送米」説話もこれを踏襲している。¹⁴

西漢、四川徳陽県の姜文進は善行に努めて子詩を授かり、嫁龐三春を迎え、孫安安を儲ける。三春は姑陳氏の病氣快復を祈るが、叔母邱姑が讒言によって陳氏は呪詛と疑い、姜詩に三春を離縁させる。三春は白雲庵に住み、安安が米を送る。後に父子は高官に就任し、邱姑は絞殺される。

「臥氷求魚」は王祥説話で、『勸世編』に取材するというが、『勸世編』は現存せず、『宣講集要』巻一「王祥臥氷」と比較すると、そこでは弟王覽が主人公であり、王覽が王祥を殺害しようとする母を諫める場面を主として述べているが、この案証では王祥を主人公として、主としており、主として王祥が継母のために孝を尽くす場面を述べている。

「楊一哭墳」は『覚世盤銘』に取材するというが、『覚世盤銘』は現存せず、同じ内容の『宣講集要』巻一「楊一哭墳」と比較すると、こ

の案証では末尾に「切莫説、尽孝要發財人才可、殊不知家貧才顯孝子、莫讓前人獨為可也。」(孝を尽くすのは金持ちだけができるのではない、貧家の孝子こそ優れており、先人の特許ではないのである)という評語を加えて主旨を明示している点が新しい。

「孝虎祠」も取材源の『覺世盤銘』が現存しないため、『宣講集要』巻二「孝虎祠」と比較すると、虎を管轄する神を『宣講集要』では「城隍」とするが、『宣講彙編』では「山王」に変えて実態に即した叙述を行っている。

你想、這虎乃毛臉吃人之物、就是獵夫打虎也怕反獵、問卦於獵神。今你被鬼摸了腦蓋、領着這張票子 何掣獲。……聞城外有一山王菩薩、甚是靈驗。(虎は人を食う野獸で獵師が虎を撃つ時も反撃を食うのを恐れて狩獵の神に占うのに、亡霊に頭を撫でられたからといって、逮捕状を持ってどうやって捕獲できるだろう。……城外に山王菩薩があつて靈驗があるという噂があつた。

また末尾に「此虎為甚於伊之子有冤、於趙老却又如此。」(この虎は趙子に恨みがあつたのに、どうして趙老にはこのように世話をしたのか)という評語を加えて虎の孝心を称揚している。

「慈孝堂」は『救世保元』に取材したというが、『救世保元』は現存せず、『宣講集要』巻四「齊婦含冤」は『漢書』「于定国伝」に基づいていて違ふ内容であり、『宣講彙編』は元関漢卿『感天動地竇娥冤』雜劇

を原典として本案証と同じ内容であるが、本案証では竇娥が処刑されず竇成文によつて救われるというハッピーエンドの新しいストーリーに改めている。

「点滴旧窠」の取材源『廻生舟』は現存しない。『宣講集要』巻三「文玉現報」と冒頭から文字は一致するが¹⁵、この案証では、『宣講集要』の不明瞭な表現を具体的な表現に変えたり(1. 2. 3. 5. 6. 7. 8. 9.)、西南官話を用いたり(7. 8. 9. 10.)、末尾に評語を述べたりして(10.)、内容を一新している。

(『宣講彙編』／『宣講集要』)

1. 忤逆還生忤逆兒。其言不虛、未有無報応的。／忤逆還生忤逆兒。備有報応。
2. 我公公冷板凳陪他一陣。／我爹爹冷板凳陪他一陣。
3. 婆婆說一升米礼物太輕。／婆婆說去送礼物太輕。
4. 你把嘴抗一下婆不敢允。／你把嘴敲一下媽就不肯。
5. 未看見我愛好來趨嘴勁。你一生徒人敬再不敬人。／×
6. 是公公茶館去磕頭邀情。／是爹爹茶館去磕頭邀情。
7. 那一回請幫工去打碑磴¹⁶。／那一回請幫工去打棹淨。
8. 你才把肉鎖鎖提進房門。／你才把肉罐子提進房門。
9. 那一回邀豬¹⁷的門外使性。／那一回推車的門外使性。
10. 如今塵世上、人看那上一輩人於父母前怎樣行為、下輩人一定

照樣。正「聖諭六言解」云、不信但看簷前水、点簷旧窠不差移。

¹⁸……／×

「砍斷手」は『勸世編』に取材したというが、『勸世編』は現存しない。この案証は『宣講集要』卷三「神譴敗子」とも冒頭から文字が一致するが¹⁹、末尾に評語を付けて主題を明らかにする点が異なる。

迨後年余、頭化人亦多、其手漸至不痛。後改邪帰正、克尽孝道。後又遵從宣講以身勸人。其人如果終身不怠、自必転禍成祥。……

「遵諭明目」は『遵諭集成』に取材するというが、『遵諭集成』は現存せず、『宣講集要』卷七「聴諭明目」と比較すれば、表現を加えてわかりやすくしたり（1）、方言を用いた表現によって親しみやすくなり（2、3）、宣詞に台詞を挿入してドラマ風に組み立てたりして（4）、新しさを出している。

- 1・人中年又才娶妻、一半姑息将就他人。／人中年又才娶妻。
- 2・万氏不許他去、要他在屋裡好叫口²⁰。／万氏不許他去。
- 3・我不晓得那們²¹撞倒²²你了。／我不晓得那个撞到你了。
- 4・婦女原要敬夫君。你說只有男子敬婦人、昧得婦人敬男人。／
婦女原要敬夫君。

卷二

「厚族獲報」は『二声雷』に取材するというが、『二声雷』は現存しない。そこで同じ内容の『宣講集要』卷八「創立義田」と比較すると、

大きく表現を変えており、叙述を補充したり（1、2、3、5、6）、語りを歌唱に変えて主人公の意志を強く表現したり（3）、別の案証を加えて主題をわかりやすくしたりしている（7）。

- 1・而千古愛祖宗之人、即是千古愛子孫之人。／×
- 2・今且說一個極愛宗族、肯吃大虧後獲大利的、與衆聽。／你們聽我說一個極愛宗族的。

3・〔謳〕叫声妻与孫兒切莫那講。今日裡細聽我詳說的端。想范氏宗与族雖多派衍。在祖宗均都是一脈流伝。夫君雖是一脈、到底有个親疎。我今日又何必親疎[□]弃。須得要存得意一体同親。／我們如今豈愁衣食住居。但我范氏宗族甚多、在我雖有親疎、在宗族看来、均是一室子孫。我二十年来立願賑濟、而今豈可自肥嗎。

- 4・我若是独自一人自居盈滿。也不管族中人啼飢号寒。者是個自了漢何足為算。身死後見祖宗有何面顔。急肥己緩肥人祖宗看淡。全不想一族人望解倒懸。薄宗族壞根本天怒人怨。你子孫縱享受定難綿延。從今後爾若輩不必埋怨。聽父言篤於親以格皇天。切莫說一定要安排家産。回蘇州先瞻族広置義田。／我若是独自一人自居盈滿。身死後見祖宗有何面顔。從今後且莫忙安排家産。回蘇州先瞻族広置義田。

5・他厚買義田、薄置私産、而竟致子孫永遠的富貴。者是不是肯吃大虧而終獲大利者耶。你看他 前那 困苦。……／你看他從

前那 困苦。……

- 6・如見有少衣欠食者、即与一件衣、朽幾升米、或佃点田地与他耕種、收稞不見尽、或借点錢与他作生理、不言利息。強者抑之、弱者扶之。……/你但從仁孝上立心、上天爺都是不負你的呀。
- 7・又有明季劉子平。每逢節氣、必治湯餅邀會。族人有不至者、再三召之、不使情隔。……此均謂之善於睦族人。總要 祖宗仁孝上設想、上天未有不默護者矣。/明朝汾州副榜鄧成美、念年歲豐歉不常、自己無力救荒、約族人商議、與一個周利倉。……總要從仁孝上立心纔好。

「友愛全節」の取材源は『頂門針』だというのが、『頂門針』は現存せず、『宣講集要』卷四「友愛全節」と比較すると、遺言を記して死者の遺志を表明したり(1)、妻の悲哀の言葉を記して夫への愛情を表明したり(2)、結語を記して案証形式を表明したりしている(3)。

- 1・却說定綱、日日耕營、受尽風霜、忽然得下病症、臥床不起、自料必死、因叫哥哥嫂嫂、上前來囑咐一番「尊一声弟与兄細聽我言。……/三弟名叫史定綱、早死無子。其妻徐氏、苦志守節。
- 2・斯時徐氏抱着他夫、放 大哭、「哭一声我的夫珠淚滾滾。……/×
- 3・從此看、女当以徐氏為効、男当以定國為法、定邦・定常為戒。/×

卷四「夫妻」

「和順化人」は『覺世盤銘』に取材するというが、前述のように『覺世盤銘』は現存せず、『宣講集要』卷七「夫婦孝和」と比較すると、馬雪堂夫妻の孝行を具体的に表明したり(1、2)、世間の不孝を具体的に述べたり(3)、わからなければ何度も勸善歌を聴かせたりする(4)。

- 1・其父母性偏惡其所為、而馬生夫婦、越加敬重、孝行甚多、姑即一二件言之。每日早起、馬生夫婦必問安。/每日早起、馬生夫婦必問父母之安。
- 2・其答応之声、低声下氣、臉上一派和悅顏色、從未高声大氣、黑臉董嘴。不但如此、於父母前、並未搔過癢、咳唾吐過口水、擠過鼻脂、世人皆謂小小儀節不足掛齒、……/答応之声、甚是和氣、答応之時、甚有愉色。雖是小小儀節不足掛齒、……
- 3・少頃、想起世情、嘆氣一声。……先時我嘆氣者、因見我妻這樣賢孝、不 想到世間的忤逆婦每為姑姊透漏錢物、与婆婆角孽。只知顧惜兒孫、全不顧自己的罪惡。何其這樣愚蠢、不覺嘆氣耳。/地方上多少因婆婆疼女、自己不服、遂而婆婆參商。……
- 4・馬生詠罷此歌、來一小女說道、同年母說、他未聽明白、請爺再唸一到。……/馬生詠罷此歌、並抄写一張。……

「規賭全貞」は『破迷鍼砭』が取材源だが、『破迷鍼砭』は現存せず、『宣講集要』巻十二「焦氏殉節」と比較すると、案証の発生時期を明記したり(1)、妻が賭博を諫める言葉を歌詞で表現したり(2)、夫が妻をごまかして賭博をやめようとしめない心情を表現したり(3)、新たに悪人が妻の姦淫を謀る場面を設定したり(4)、妻が姑に苦衷を訴える場面を設定したり(5)、夫が心から後悔する場面を設定したり(6)、末尾に案証に特有の「この案から見ると」に始まる評語を置いたりして(7)、新しさを出している。

1・本朝乾隆年間、江南宣城県、有一秀才、姓陸名鑑明。／本朝、寧国府宣城県黄池鎮、有一陸生名鑑銘。

2・焦氏復跪夫前、遂流泪道、〔詞〕夫君息怒聽妻嘆。……／×

3・陸鑑明聽者番言詞、誑妻說道、嫖賭洋煙、戒到要戒、但我的賭賬、未能除清、只要贏來、把賬開消了。／×

4・忽一日、有劣棍賊二八、見陸焦氏人才殊絶、欲謀姦淫、……

／×

5・唉、婆婆。〔詞〕焦氏女忽 得婆把話講。低下頭不由奴心口相商。……／×

6・厥後、陸鑑明回節孝祠、痛苦難過、悔心作論、勸衆道、「陸鑑明背了時自悔不転。……」／×

7・從者案看來、若論士農工商均当各立品行、……人盡鑒之。／今之好賭者、盡觀之。

「跪門受譴」の取材源は『勸世新編』だが、『勸世新編』は現存せず、『宣講集要』巻七「惡婦受譴」と比較すると、西南官話を多く用いて聴衆が聞きやすくしている点が特徴である。

悔不該那一回呔你的媽。你光呔我的媽、我的先人都 你叨転了。

／悔不該那一回連你的媽。你光喚我的媽、我的先人都被你們喚了。

「断機教子」の取材源は『廻生舟』だが、前述のように『廻生舟』は現存しない。『宣講集要』巻四「断機教子」と比較すると、秦雪梅が亡き許嫁を弔問する場面を設定したり(1)、商輅が雪梅に反抗したことをわびる場面を設定したり(2)、西南官話を使用したり(3)、雪梅と商輅の会話を設定したり(4)、世間の親が子を甘やかしてだめにすることを説く場面を設定したりして(5)、よりわかりやすい案証にしている。

1・一進商門、見丈夫設有靈位、遂擺設祭礼、哭泣弔以情曰、「嗚呼、夫郎。丟下妻子好悽涼。……」／×

2・於是輅 尊祖父母之命、……向母親面前、泣涕請罪曰、「〔謳〕尊一声我母親怒息雷霆。……」／秦雪梅 得商老夫婦啼哭不止、……教訓路 一番。

3・日夜的將嬌 殷勤撫引。／日夜的將嬌兒殷勤撫養。

4・断了機回秦府不把兒訓。「兒哪。者我一心如此。不管你的
是實。」「哎呀。娘。使不得。兒錯了。兒認錯。」……／断了機回秦
府不把兒訓。

5・究之、不能効彼所為、每多姑息養奸、生怕他苦了。至若孤兒
独子、由他放縱、驕養性成。……／×

四 小説と戯曲

本書ではストーリーをわかりやすくするために、先行する小説や戯
曲を借りて物語性のある案証を創作している。それらは以下の案証で
ある。

卷一

「慈孝堂」―元関漢卿『感天動地竇娥冤』雜劇。『竇娥冤』では、竇
娥が処刑される際に冤罪であることを天地が証明し、十六後にその亡
霊が兩淮提刑肅正廉訪使として赴任した父の竇天章の前に冤罪を訴え
るが、この案証では竇娥が処刑される前に冤罪がはらされるというス
トーリーに書き換えて勸善懲惡の主旨を明らかにしている。

卷二

「棄家贖友」―『古今小説』卷八「呉保安棄家贖友」とほぼ同じ内容
である。

「舍身全文」―『古今小説』卷七「羊角哀捨命全文」とほぼ同じ内容
である。

「生死全信」―『古今小説』卷十六「范巨卿鷄黍死生交」とほぼ同じ
内容である。

卷四

「借狗勸夫」―元『楊氏女殺狗勸夫』雜劇と内容は似ているが、人名
を変えており、『殺狗勸夫』雜劇では、孫栄の妻楊氏が孫栄に弟孫華と
の仲を修復させるため、犬の死骸を用いて柳隆卿・胡子転の虚偽を暴
き、開封府尹の王僚然が裁判で柳・胡を処罰する。

五 結論

『宣講彙編』の編集については序文もないことから手がかりがなく、
内容を分析するほかない。まず各巻の内容を分析すると、各巻はそれ
ぞれ孝・悌・義・貞の四テーマで意図的に分類されている。これは宣
講人が宣講を行う時にどこから選べばよいかわかりやすくするため
であろう。もともと宣講書は「聖諭六訓」や「聖諭十六条」によって分
類して案証を収録していたが、どうしても孝悌義貞のテーマが多くな
り、次第にそうしたテーマの案証に偏重することになったと言える。
またそれぞれの案証には取材源が注記されているものの、それらは現
存せず、取材源のテキストと内容の比較をすることはできないが、比
較的早期に編輯された『宣講集要』との比較は可能であり、比較を行

うと、『宣講彙編』収録の案証は、総じて表現をわかりやすくしており、西南官話を用いて地元の者が聞き取りやすしたり、宣詞を用いて人物の心情を強く表現したり、よく知られた故事を改編してストーリーを構築したりしている。従来、この種のテキストに対する分析が行われたことがなかったため、本論ではこれを考察した。

注

- 1 早稻田大学風陵文庫蔵。
- 2 『晋書』王祥・弟覽伝に、「祥性至孝。早喪親、繼母朱氏不慈、數譖之、由是失愛於父。每使掃除牛下、祥愈恭謹。父母有疾、衣不解帶、湯藥必親嘗。母常欲生魚時、天寒冰凍、祥解衣將剖冰求之、冰忽自解、雙鯉躍出、持之而歸。母又思黃雀炙、復有黃雀數十飛入其幙、復以供母。鄉里驚歎、以為孝感所致焉。有丹柰結實、母命守之、每風雨、祥輒抱樹而泣。其篤孝純至如此。」〔覽字玄通。母朱、遇祥無道。覽年數歲、見祥被楚撻、輒涕泣抱持。至于成童、每諫其母、其母少止凶虐。朱屢以非理使祥、覽輒與祥俱。又虐使祥妻、覽妻亦趨而共之。朱患之、乃止。祥喪父之後、漸有時譽。朱深疾之、密使酖祥。覽知之、徑起取酒。祥疑其有毒、爭而不與。朱遽奪反之。自後朱賜祥饌、覽輒先嘗。朱懼覽致斃、遂止。〕
- 3 原典は元関漢卿『感天動地竇娥冤』雜劇。
- 4 『後漢書』卷七十六「許荆伝」に、「許荆、字少張、会稽陽羨人也。祖父武、太守第五倫、奉為孝廉。武以二弟晏、普未顯、欲令成名、乃請之曰、礼有分異之義、家有別居之道。於是共割財產以為三分、武自取肥田宅奴婢強者、二弟所得併悉劣少。郷人皆称弟克讓而鄙武貪婪、晏等以此併得選舉。武乃会宗親、泣曰、吾為兄不肖、盜声窃位、二弟年長、未豫榮祿、所以求得分財、自取大譏。今理産所增、三倍於前、悉以推二弟、一無所留。於是郡中翕然、遠近称之。位至長樂少府。」明馮夢竜『醒世恒言』卷二「三孝廉讓産立高名」。
- 5 『毛詩』邶風「二子乘舟」に、「二子。乘舟思伋寿也。衛宣公之二子。爭相為死。国人傷而思之。作是詩也。」
- 6 『史記』卷三十七「衛康叔世家」に、「十八年、初、宣公愛夫人夷姜、夷姜生子伋、以為太子、而令右公子傅之。右公子為太子取齊女、未入室、而宣公見所欲為太子婦者好、説而自取之、更為太子取他女。宣公得齊女、生子寿、子朔、令左公子傅之。太子伋母死、宣公正夫人与朔共讒惡太子伋。宣公自以其奪太子妻也、心惡太子、欲廢之。及聞其惡、大怒、乃使太子伋於齊而令盜遮界上殺之与太子白旄、而告界盜見持白旄者殺之。且行、子朔之兄寿、太子異母弟也、知朔之惡太子而君欲殺之、乃謂太子曰、界盜見太子白旄、即殺太子、太子可母行。太子曰、逆父命求生、不可。遂行。寿見太子不止、乃盜其白旄而先馳至界。界盜見其驗、即殺之。寿已死、而太子伋又至、謂盜曰、所當殺乃我也。盜併殺太子伋、以報宣公。宣公乃以子朔為太子。十九年、宣公卒、太子朔立、是為惠公。左右公子不平朔之立也、惠公四年、左右公子怨惠公之讒殺前太子伋

- 而代立、乃作乱、攻惠公、立太子伋之弟黔牟為君、惠公奔齊。」
- 7 清陳宏謀編『教女遺規』中に、「歐陽氏、宋人、適廖忠臣、踰年而舅姑死于疫。遺一女閨嬢、才数月、歐陽適生女、同乳哺之。又数月、乳不能給、乃以其女分隣婦乳而自乳閨嬢。二女長成、歐陽于閨嬢、每倍厚焉。女以為言。歐陽曰：“汝、我女。小姑、祖母之女也。且汝有母、小姑無母、何可相同？”因泣下。女愧悟、諸凡讓姑而自取余。忠臣后判清河、二女及笄、富貴家多求姪氏。歐陽曰：“小姑未字、吾女何敢先。且聘吾女者、非以吾愛吾女乎。”其問諸隣人、卒以富貴家先閨嬢。簪珥衣服器用、罄其始嫁粧奩之美者送之、送女之具不及也。終其身如是。閨嬢每謂人曰：“吾嫂、吾母也。”歐陽歿、閨嬢哭之、至嘔血、病歲余。聞其哭者、莫不下淚。呂氏曰：“姑嫂、世所謂參商人也。嫁女之家、聞有小叔叔則戚、而嫂亦厭惡此兩人、若不可一日有。何者？為母耳目、譖愬相虐也。世之為嫂者、誠如歐陽氏賢、則举世皆閨嬢矣。吾于是知一人人道、兩人成名、同室仇讐、過分寡耳、難以罪一人也。」
- 8 出典は『古今小説』卷八「吳保安棄家贖友」。原典は唐牛肅『紀聞』。
- 9 出典は『古今小説』卷七「羊角哀捨命全文」。原典は漢劉向『列士伝』。
- 10 出典は『古今小説』卷十六「范巨卿鷄黍死生交」。原典は晋干宝『搜神記』卷十一。
- 11 『正統道藏』正一部『高上大洞文昌司祿紫陽寶籙』卷上「文昌儲佐列神品」に「巴西崑神和來孫」を記載する。
- 12 末尾に「此案莫以為虛、『伝家宝』『暗室燈』俱載之」と出典を記す。
- 13 原典「楊氏女殺狗勸夫」雜劇では、主人公は楊氏、夫は孫榮、弟は孫虫児、悪友は柳隆卿・胡子軫。
- 14 原典は明陳熊齋『姜詩躍鯉記』四卷。
- 15 両者は「你們請聽、今試說一個不安父母心的」から始まる。
- 16 西南官話。「碑」は墓碑。「中国漢語方言大詞典」、p.644。「磴」は「用來加高的較厚的整塊石頭或木頭。」「中国漢語方言大詞典」、p.7322。
- 17 西南官話。「趕豬」に同じ。豚を追う。「中国漢語方言大詞典」、p.7264。
- 18 『聖諭六訓解』「孝順父母」に、「古人說得好、『孝順還生孝順子、忤逆還生忤逆兒。但看簷前水、点点不差移。』這箇報応断然不爽。」
- 19 「道光」二十九年後四月十三日、璧山県、新出一奇案。」
- 20 叫口一動詞。「幫大人干点活。」中原官話。河南南陽。「中国漢語方言大詞典」、p.1210。
- 21 那們一代詞。「怎麼。」「哪些人。」西南官話。湖北。「中国漢語方言大詞典」、p.4125。
- 22 倒一助詞。表時態「着」、「了」。西南官話。四川成都。「中国漢語方言大詞典」、p.4920。
- (長江大学講座教授・山口大学大学院東アジア研究科教授)